



# 相次ぐ希少種、大型種の出現で来年へ期待がふくらむ！

## 2017年「トンボはドコまで飛ぶかプロジェクト」調査結果概要

田口正男（明星大学理工学部非常勤講師・東京農業大学昆虫学研究室客員研究員）

2017年「トンボはドコまで飛ぶかプロジェクト」本調査は、7月31日～8月28日に臨海部10地点、内陸部その他6地点の計16地点において、市民ボランティア+事業所職員など、のべ242名の参加によって行われた。

捕獲された種類数および個体数は、臨海部全体で10種608頭、内陸部その他で14種483頭の計16種1091頭であった。特に、臨海部10種という捕獲数は5年ぶりに平年並みの数値に戻ったことになるが、ウスバキトンボを除いた捕獲個体数は低い水準であった。

今回、捕獲種で注目されたのは、調査15年目にして臨海部初となった大型種ヤブヤンマであった。これは「マツダR&Dセンター横浜」でのことで、他にもここでは初めてのギンヤンマも捕獲されている。

また「JFEトンボみち」でも大型種マルタンヤンマが捕獲され、本調査全体でも5年ぶりの記録となった。さらに、臨海部以外でも「高田池」、「本牧市民公園」では、本調査では今までわずかしが記録されていなかったリスアカネがそれぞれ1頭と2頭とあいついで捕獲された。

臨海部の優占3種であるシオカラトンボ、シヨウジョウトンボ、オオシオカラトンボだが、捕獲個体数はそれぞれ134頭、52頭、28頭で、前年調査が226頭、40頭、20頭であったことより、最優占種のシオカラトンボの捕獲数だけほぼ半減したことが際立った。

かつて1度最優占種になったシヨウジョウトンボは微増し、再び両種の間が拮抗しだしている。2回目の最優占種を巡っての種交代の攻防が起こりうるのか、次年度以降、目を離せない状況となった。

いずれにしてもこの2年間、こうした大型種、希少種の出現があいついでおり、2014年より2年間続いたほぼ基本6種に絞られ、極端にシオカラトンボに偏る傾向は、とりあえずここで終止符を打ったかたちだ。

それから、昨年初めて捕獲ゼロとなったチョウトンボだが、「麒麟ビール横浜工場」で1頭捕獲されたほか、他にも複数個体目視された。ここへきて、さまざまな点で京浜臨海部のトンボ目群集の勢い、そしてトンボネットワーク

機能の高まりが感じられる。さらに次年度の調査でどんなトンボ種が姿を現すか、期待が膨らむ。



最優占種3種のうちシオカラトンボが半減



大型トンボの出現 ヤブヤンマ マルタンヤンマ



臨海部+内陸部 16種 1091頭記録

2017調査トピック

